

排外主義を規定／抑制するものはなにか

—マルチメソッドによる総合的な要因の検討—

中原 健登
HS27-0105J

1 問題の背景

2010年代の日本において、排外主義の台頭が問題視されつつある。たとえば2016年には、外国人への差別的な言動を取り締まることを目的とした法律が制定されたが、こうした動きからも、排外主義に対する日本社会の関心の高まりを読み取ることができるだろう。

また、排外主義の台頭を受けて、主にジャーナリズムの観点から「排外主義とはなにか」を明らかにしようとする試みもいくつかなされた（たとえば安田 2012 など）。しかし、そうした試みの多くは、一部の過激派に着目しがちで、排外主義それ自体の理解にはあまり寄与していないという課題もある。排外主義が問題視されるということは、それを受容するような土壌が広く社会に存在するからである。排外主義とはどのようなものなのかについて真に理解するためには、それを特殊な現象ではなく、普遍的な現象であるとみなしたうえで、社会的な諸要因との関連の中から捉えなおす必要がある。

Giddens は、近代化の進展はその帰結として必然的に差別と排除をもたらすと述べている（Giddens 1991=2005）。海外に目を向けても、米国大統領の「国境の壁」発言や英国のEU脱退騒動などのように、差異を忌避し同質性を指向する態度の高まりをみつけることができる。排外主義の台頭が近代化の帰結であるとするならば、その規模が広範にわたることに疑問はないだろう。また、排外主義が近代化の病理であるなら、

排外主義を理解することは、複雑な現代社会を理解することにつながる可能性がある。

2 先行研究と分析方針

排外主義はしばしばナショナリズムと同義に捉えられるが、そのような考え方は適切ではない。国家に対する帰属意識は一元的なものではなく、複数の下位概念からなる多元的なものである（田辺 2011）。ナショナリズムの高まりが直接的に異質な他者の排除につながるのではない。

排外主義を規定する要因には、「年齢」「社会階層」「純化主義」があるとされる（田辺 2011 前掲;石田 2016）。「純化主義」とは民族の血筋やその国に生まれたことといった生得的な要因によって彼我を区別するような態度である。したがって、「純化主義」を掲げることは排外主義的な主張につながりやすい（田辺 2010）。

排外主義の抑制要因は、「年齢」「教育」（石田 2016 前掲）と、「接触」「都市度」である。「接触」とは、異なる文化的背景をもつ人々との交流頻度であるが、「接触」が排外主義の抑制要因となりうるためには、「制度的に支援された、共通の目的や利害をもつ、対等な地位における接触」（永吉 2008）である必要がある。また、都市は多様な下位文化を育むことを通じて非通念性を増大させるという（Fischer 1975=1982）。非通念性の増大は多様性の前提条件となりうるものであり、その点で「都市度」は排外主義の抑制要因であると考えられる。

以上が排外主義に関する研究から導かれた

知見であるが、これらの要因は単独で作用しているのではない。排外主義を理解するためには、その規定・抑制要因の関連構造を明らかにする必要がある。

3 使用データと分析方法

分析には、International Social Survey Programが2013年に行ったNational Identity IIIのデータを使用した。しかし、先行研究で示唆されていた排外主義に影響を及ぼす要因のうち、「接触」の効果だけはこのデータでは検討できなかった。したがって、「接触」を除く要因が排外主義に及ぼす効果については計量分析を用いて、「接触」の効果についてはインタビュー調査を用いてそれぞれ検討した。

計量分析における分析手法は、探索的因子分析、確証的因子分析、共分散構造分析の併用である。このように複数の手順を踏む理由は、本論文の関心である排外主義が直接観測できない潜在的な変数だからである。排外主義の規定・抑制要因を探るためには、まず、探索的因子分析によりナショナル・アイデンティティが排外主義を含む複数の下位概念からなることを明らかにし、確証的因子分析により排外主義と関連の強い他の下位概念を特定する必要がある。排外主義を従属変数として利用するために、複数の分析手法を組み合わせるといふことを採用した。

インタビュー調査は、本学に在学中の学生9名を対象として、「接触」の経験とその密度、「接触」による意識の変化について聞き取りを行い、その結果をもとに「接触」が排外主義に及ぼす影響について分析をした。

4 分析結果

4.1 探索的因子分析の結果

探索的因子分析を行ったところ、【排外】【愛国】【条件】【成果】【リベラル】という5因子を抽出することができた(図1)。【排外】因子は、外国人を脅威とみなし、その排除を志向する潜

在的な態度である。【愛国】因子は、日本社会の公正さや平等、民主主義の現状などを誇りに思う潜在的な態度である。【条件】因子は、ある人を日本人としてみなすために重要視する条件を表している。【成果】因子は、日本人が科学・文化・芸術の分野であげた成果を誇りに思う潜在的な態度を示している。【リベラル】因子は、超国家的なアイデンティティをもち、マイノリティの権利擁護を重視する潜在的な態度である。

探索的因子分析により抽出された5因子のうち、【排外】因子が、排外主義という概念を代表しているとみることができる。排外主義は、他の下位概念に回収されない独自性をもつことがここから明らかとなった。

4.2 確証的因子分析の結果

確証的因子分析では、先の探索的因子分析で抽出されたナショナル・アイデンティティの下位概念間の関連構造が明らかになった(図1)。

まず、本論文の関心である排外主義であるが、【愛国】【条件】と一定の相関関係にあることが示された。排外主義が愛国主義とも関連をもつということから、「愛国心の発露が排外主義へとつながる」という言説は、日本においては当てはまっているように思える。しかし、この点においては、先行研究で示されている排外主義の規定・抑制要因群との関連構造の中から探る必要がある。

【成果】因子は、【愛国】因子と相関をもつ。どちらも世界の中での日本の立ち位置を誇りに思う態度であることを考えれば、この結果は自然である。しかし、【成果】因子はその誇りの源泉が他人の成果に委ねられている点で、流動的で一時的なものであるという違いがある。

【リベラル】因子は他の下位概念と、いずれも無相関であった。この結果は、現代日本において、「リベラル」は他のどのような立場とも異なる、独自性が強い立場ということを表している。

4.3 共分散構造分析の結果

以上までの因子分析の結果を踏まえ、従属変数に【排外】因子を、独立変数に【愛国】【条件】因子、ならびに先行研究で明らかになった排外主義の規定・抑制要因群を用いて、共分散構造分析によりその関連構造を探った(図2)。

分析結果からはまず、独立変数群を投入すると、【排外】因子と【愛国】因子の間に存在していた関連が消えることがわかった。すなわち、愛国心をもつことが排外的な態度につながるという言説は誤りであることがわかった。

排外主義を直接的に規定しているのは【条件】因子である。すなわち、「ある人を日本人とみなすための条件」を強く意識することが、排外意識の前提となっているのである。「年齢」は、【条件】因子を経由することで、間接的に排外主義の規定要因となりうる。

排外主義の抑制要因は「教育」である。最終学歴が高いほど、排外意識は抑えられる。今回の分析において、排外意識の抑制要因は「教育」のみであった。

4.4 インタビュー調査の結果

インタビュー調査では、計量分析で扱えなかった「接触」の効果を検討した(表2)。

分析からは、おおむね先行研究と同様の結果が示された。すなわち、共通の利害関心をもった対等な関係における接触が、外国人に寛容な態度につながっているとう結果である。

しかし同時に、「あいさつを交わすだけ」のような密度の低い接触であっても、寛容性を向上させたケースも確認できた。その理由には2つのことが考えられる。ひとつにはインタビュー対象者が本学の学生であることから、相対的に高学歴であったこと。計量分析でも明らかになったように、学歴は排外主義の直接的な抑制要因である。もうひとつは、「接触」に至るまでの個人的な経験が間接的に影響を及ぼしていること。過去の辛い経験を参照することが、マイノリティのおかれた立場への理解と共感を促進していることが考えられる。

5 結論

排外主義の規定要因は、直接的には、「日本人としての条件」を強調するような態度である。「年齢」は、そうした態度を経由することで間接的に排外主義の規定要因となりうる。対して、排外主義の抑制要因は「教育」である。高い学歴は、直接的に排外意識を抑制する。

異文化交流は偏見を抑制し、寛容性を向上させる効果がある。しかし、「接触」の前段階における過去の経験が、間接的に「接触」の効果を規定している可能性あることが、今回の結果からは示唆された。

文献

- Fischer, Claude Serge, 1975, "Toward a Subcultural Theory of Urbanism." *American Journal of Sociology*, 80(6): 1319-41. (=1983, 奥田道大・広田康夫訳「アーバニズムの下位文化理論に向けて」『都市の理論のために——現代都市社会学の再検討』多賀出版, 50-94.)
- Giddens, Anthony, 1991, *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*, Cambridge: Polity Press. (=2001, 秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳『モダニティと自己アイデンティティ』ハーベスト社.)
- 石田淳, 2016, 『日本人』の条件——インターネット調査データを用いた社会的カテゴリー分析『社会学評論』67(2): 182-200.
- 永吉希久子, 2008, 「排外意識に対する接触と脅威認知の効果——JGSS-2003の分析から」『日本版 General Social Survey 研究論文集』7: 259-270.
- 田辺俊介, 2011, 『外国人へのまなざしと政治意識——社会調査で読み解く日本のナショナリズム』勁草書房.
- 安田浩一, 2012, 『ネットと愛国——在特会の「闇」を追いかけて』講談社.

【資料】

表1 探索的因子分析の結果

概念図上での 表記	観測変数	愛国	排外	成果	条件	リベラル	共通性
愛国①	日本への愛着	0.571	-0.011	-0.173	-0.094	-0.093	0.262
愛国②	ほかの国の国民より、 日本人でありたい	0.619	0.016	-0.016	0.071	-0.080	0.417
愛国③	ほかの国より、 日本は良い国	0.596	0.007	-0.051	-0.012	-0.065	0.334
愛国④	誇り： 日本における民主主義の現状	0.449	-0.044	0.015	0.079	-0.016	0.228
愛国⑤	誇り：日本の経済的成果	0.445	-0.132	0.047	-0.027	-0.001	0.205
愛国⑥	誇り： 日本社会における公正さと平等	0.432	-0.115	0.044	0.048	0.028	0.209
愛国⑦	誇り：日本人であること	0.721	-0.055	0.066	-0.049	-0.072	0.533
愛国⑧	愛国心：日本の地位を高める 愛国心：	0.510	0.161	-0.027	0.070	0.237	0.413
愛国⑨	日本のまとまりを 維持するために必要	0.448	0.144	0.058	0.024	0.168	0.320
排外①	日本経済を守るため、 外国製品の輸入を制限	-0.028	0.542	0.087	0.021	0.045	0.309
排外②	日本のテレビは日本製の 映画や番組を放送すべき	0.172	0.488	-0.019	-0.006	0.131	0.324
排外③	外国の大企業は、日本の企業に ダメージを与えている	0.019	0.476	-0.050	-0.119	0.096	0.218
排外④	定住外国人の増加は、 犯罪率を上昇させる	0.094	0.560	-0.034	0.006	-0.070	0.346
排外⑤	定住外国人は、日本人から 仕事を奪っている	-0.088	0.647	-0.016	0.008	-0.001	0.406
排外⑥	定住外国人の増加によって、 日本の文化は損なわれる	-0.066	0.680	0.012	0.006	-0.010	0.450
排外⑦	定住目的の外国人は、 もっと増えたほうが良い	0.012	-0.571	-0.078	0.060	0.263	0.357
成果①	誇り：日本人の科学分野での成果	0.081	-0.013	0.577	-0.003	-0.103	0.379
成果②	誇り： 日本人のスポーツ分野での成果	0.058	0.067	0.738	-0.038	0.025	0.584
成果③	誇り： 日本人の文芸の分野での成果	-0.046	-0.012	0.811	0.022	0.033	0.639
条件①	重要：日本で生まれたこと	0.001	0.174	-0.007	0.466	-0.004	0.306
条件②	重要：人生の大半を 日本で暮らしていること	-0.026	-0.071	-0.060	0.695	-0.008	0.435
条件③	重要：日本語が話せること	-0.037	-0.071	0.072	0.631	-0.004	0.372
条件④	重要：先祖が日本人であること	0.119	0.161	-0.007	0.462	-0.016	0.349
リベラル①	日本の短所を自覚すれば、 世界は良くなる	-0.104	0.099	-0.012	0.117	0.485	0.278
リベラル②	自分は世界の市民である 外国人や少数民族が	-0.100	0.022	0.002	-0.101	0.458	0.228
リベラル③	自らの文化を守れるよう、 政府は援助すべき	0.049	-0.070	0.022	-0.057	0.495	0.250
リベラル④	来日外国人は新たな考えを もたらし、日本社会をよくする	-0.018	-0.319	0.047	-0.016	0.406	0.261

因子抽出法：最尤法
回転法：斜交回転

図 1 ナショナル・アイデンティティの概念構造

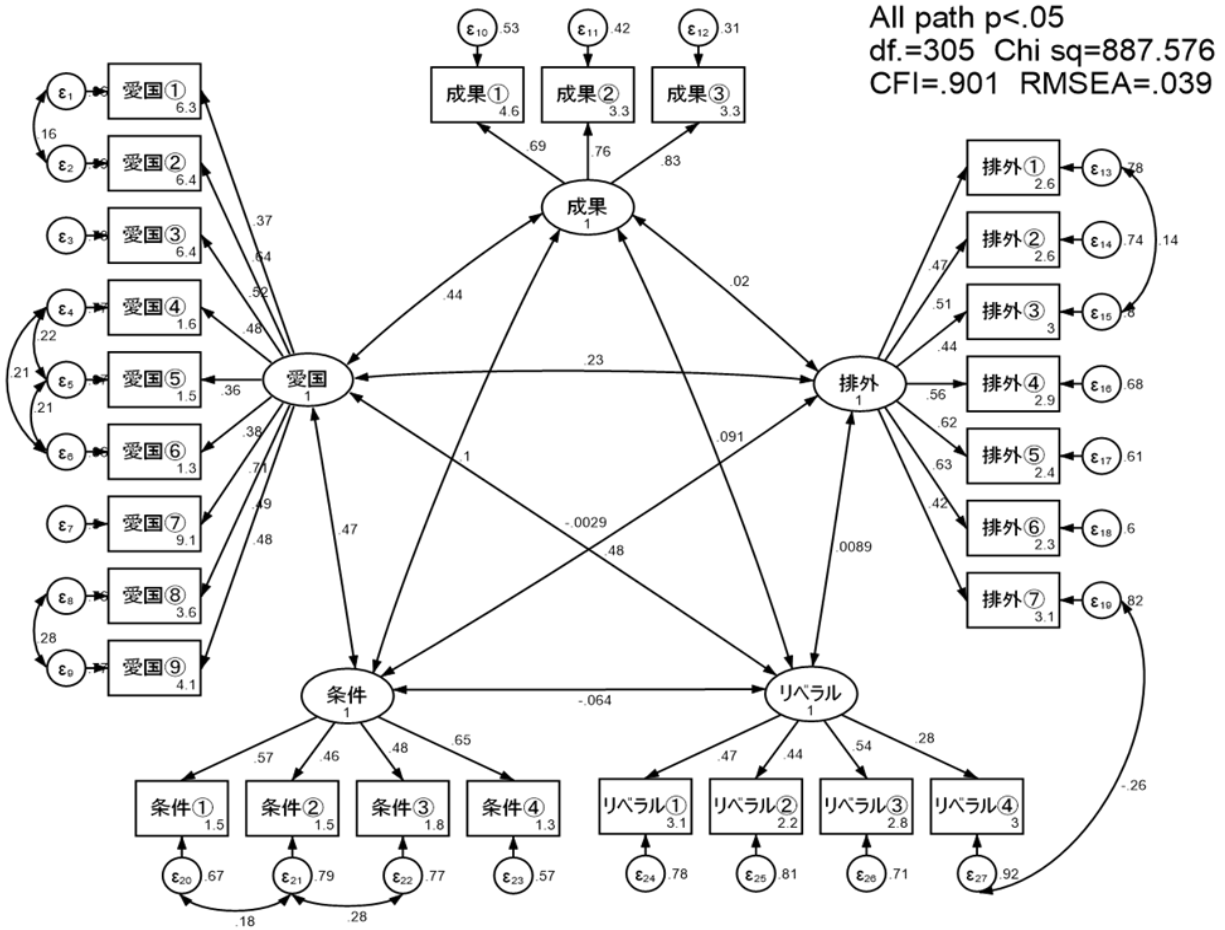


図 2 排外主義の規定/抑制要因に関する構造方程式モデル

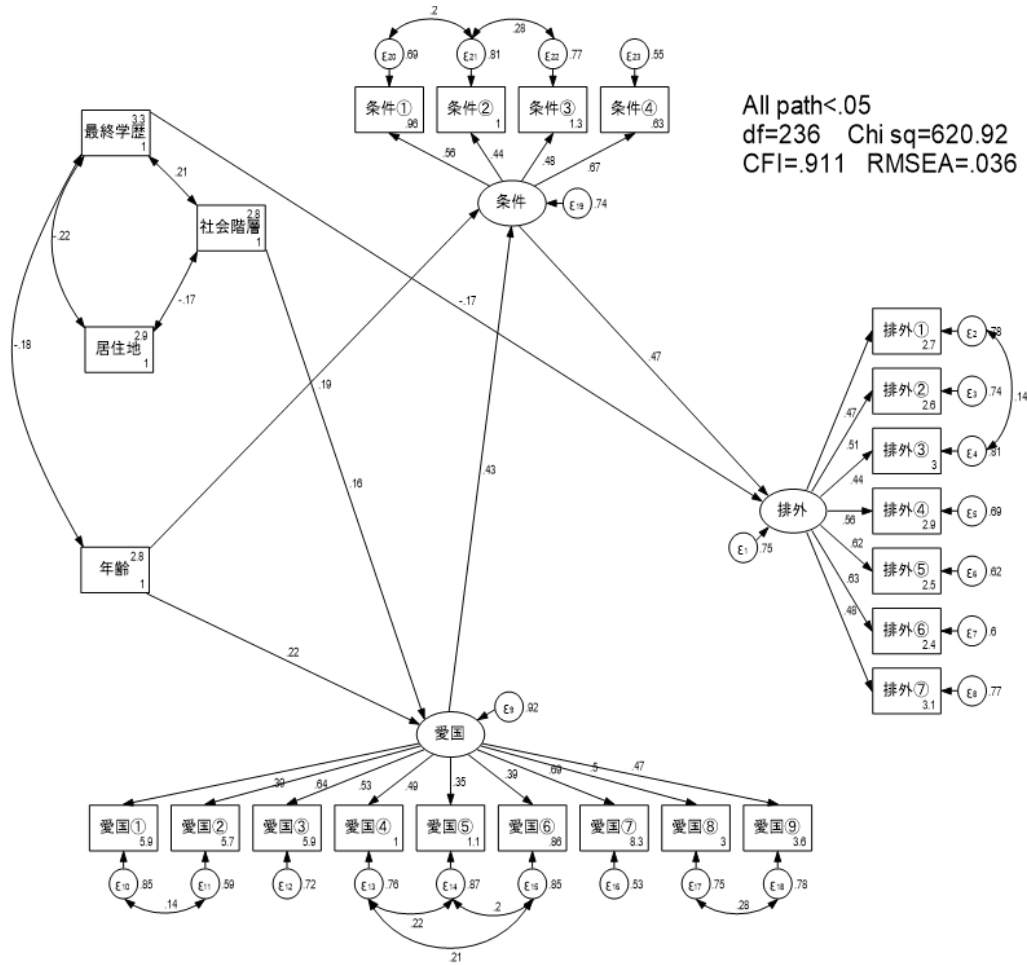


表 2 インタビューの質問項目とそれに対する回答者の反応の真理値表 (一部抜粋)

	外国人の知り合い	意識の変化
A	○	△
B	△	○
C	△	○
D	○	○
E	○	△
F	○	○
G	○	○
H	○	○
I	○	△

※強調字体は先行研究で見られなかった知見